

自然の中での集団宿泊・野外体験活動

鳥取県大栄町立大栄中学校

学校の概要

学校規模

学級数：11（内特殊学級1学級）

生徒数：341人

教職員数：21人

体験活動の観点からみた学校環境

大栄町は鳥取県の中央に位置し、白砂青松の日本海岸に面した、スイカと長芋を主生産物とする人口九千余人の農業の町である。

本町には、まわりに海や山など自然が多く残っているが、子どもたちは外で遊ぶことは少なく、自然体験は乏しい。

従来より、特産品の生産にかかわる体験活動を教育実践に取り入れてきた教育に関心の強い町でもあり、本校の自然体験を重視した実践を歓迎する雰囲気地域にある。

連絡先

〒689-2221

鳥取県大栄町由良宿340番地

電話：0858-37-2024

FAX：0858-37-5509

電子メール：

daiei-j@mailk.torikyo.ed.jp

体験活動の概要

活動のねらい

たくましく生きぬく力を育てるきっかけをつくる。

ゆったりとしたスケジュールの中で生活しながら、自分たちの工夫と自然の力を利用して「食べる」ことを体験する。

集団生活におけるルールの大切さを学び、集団の中で自分の役割を果たす喜びと大切さを学ぶ。

日常生活に感謝する心を養う。

主な活動内容・方法

第1学年全員参加の学校行事

活動地：鳥取県名和町

期間：3泊4日（5月中旬）

自然に関わる様々な体験活動、技術体験活動で竹箸づくり、鶏肉さばき体験でカレーライス作り等

体制等の工夫

現地：管理職、養護教諭、担任教諭

現地：調理師

活動の成果

集団生活の規律意識が育つとともに、自分で考えて行動することの大切さを学んだ。

生活の中での道具の重要性の理解。

自然の恵みと食の関係を理解し感謝の心が育った。

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

- ア 自然の中における集団での宿泊生活を経験することにより、集団生活のきまりの重要性を理解するとともに、自分の役割を果たす喜びと大切さを学ぶ。
- イ 人や自然とのふれあいを深め、豊かな心を養う。
- ウ 自然の中で、ゆったりとしたスケジュールで活動しながら、自分たちで工夫して生活し、自然の恵みと力を利用して「食べる」ことを体験して、たくましさを鍛える。
- エ 満ち足りた日常生活を送ることができることに、当たりまえと思わず、感謝する心を持つことができる。

(2) 全体の指導計画

ア 活動の名称

「自然の中での集団宿泊・野外体験活動」

イ 実施学年

第1学年

ウ 活動内容

自然に関わる体験活動：オリエンテーリング，薪集め，山菜とり

技術体験活動：ナタ・ナイフ・のこぎりの使い方，竹の伐採，竹箸づくり，テント設営
かまど作り，古代人の手法による火おこし

調理体験活動：鶏肉のさばき方実習，魚のさばき方実習，カレーライスづくり，鶏がらスープのラーメンづくり等

クラス交流活動：スポーツ・ゲーム大会，キャンプ・ファイヤー

エ 教育課程上の位置付け

(ア) 教育課程内の教育活動と位置付けている。5月中旬に3泊4日の宿泊行事として実施する。

(イ) 活動内容の位置付けは、総合的な学習の時間、特別活動の学校行事や学級活動、一部を各教科の授業時数としている。

オ 実施時期

(ア) 日数は、5月15日(火)から5月18日(金)までの3泊4日

カ 活動場所

鳥取県西伯郡名和町神田のキャンプ場

キ 継続の状況等

中学校入学直後の一年生を対象に中学生としての生活の在り方を自然の中でしっかりと身に付けようとするとともに、この機会を学級づくりに役立てる観点からも毎年続けて行っている。

2 活動の実際

(1) 事前指導

ア ガイダンス・・・目的・概要の説明

イ グループワークトレーニング・・・学年・学級あるいは班別の行動に備えた行動の仕方を練習しておく。

ウ 班ごとの話し合い・・・献立・持ち物・活動内容について打ち合わせをしておく。

(2) 活動の展開

ア 活動の場や施設

鳥取県西伯郡名和町神田は、中国山脈の「大山」の山麓がなだらかにつづいて日本海へ続いていく中間地点にある。リンゴ園があったり、ゴルフ場があったりする農園地帯である。そうした場所に名和町町営の宿泊施設がある。広大なキャンプ場も備えた保養施設である。このキャンプ場を基地にして周辺の山林や名和町内全域が活動の場である。

イ 活動プログラム(概略)

1日目 現地での開校式 オリエンテーション 竹箸づくり 昼食 クラス対抗長縄跳び大会 テント設営・かまど作り 火おこし 夕食作りと夕食 夕べの集い	2日目 朝の集い 朝食 オリエンティング 鶏のさばき方講習 鶏肉のカレー作り 夕べの集い 講演 鶏がらの煮込み	3日目 朝の集い スタミナラーメン作り 昼食 宿舎生活 夕食 入浴
4日目 朝の集い 朝食 学級の話し合い 昼食 ボランティア活動 閉校式		

ウ 指導者・協力者

現地では、教職員では、管理職，担任教諭，養護教諭，補助担任教諭合わせて7人が4日間指導に当たった。また，現地の協力者として，宿泊施設の支配人兼料理長など4人の方をお願いした。

料理長には，ナタなど刃物の使い方の指導，鶏のさばき方の指導，魚のさばき方の指導，鶏ガラスープの煮込み方の指導，山菜の見分け方取り方の指導などをお願いした。

エ 生徒の活動の状況(主な活動を抜粋)

【竹箸づくり】

初日の昼は自宅から持参した弁当を食べるのだが，箸は持参しないで現地で製作して，自作の竹箸で食べることにした。ナタとのこぎりと，ナイフを使って全員が自作した。けがをしないよう，事前にしっかりと道具の使い方の指導を受けて作業をした。初めての経験であったがみんなうまく作れた。自作の箸で食べる弁当の味は格別であったようだ。

【火おこしの体験】

家庭ではスイッチをひねるだけで点火できるガスコンロを使っている生徒に、古代人がしていた方法で火をおこし、せっかくおこした火は4日間消さないで火守りをして使うことにした。古代人の生活を味わってみると、いかに今の私たちの生活がありがたいものか分かるであろうというねらいである。その方法は木と木をすりあわせて摩擦熱で火おこしをする方法である。簡単には火はおきないので大変苦勞をした。



〔火おこし〕

【オリエンテーリング】

6人ほどのグループで、名和町内全域にわたって設けてあるポイントをまわって帰ってくる。朝10時に出発して夕方5時頃に帰ってくる班もある。班によっては往復20キロは歩く大オリエンテーリングである。菜の花の咲いた野道を、時おり聞こえるウグイスの声を聞きながら、きれいな空気を吸いながら、鼻歌を歌って歩く中学生の姿はとてもいい。

【鶏のさばき】

白色レグホン種の鶏（羽毛・頭・足・内臓を取り除いたもの）をさばいた。各班に1羽ずつ用意し、事前に調理師にさばき方を指導していただいて、各班ごとにさばいた。はじめは気味悪がったが、それができなければ夕食を食べられないこともあり、みんな一生懸命に取り組んだ。夕食は鶏肉のカレーライスである。鶏からはみんな集めて大鍋で煮込んで鶏がらスープを作ることにした。



〔丸の鶏をさばく〕

【鶏がらの煮込みと火守り】

鶏がらをキャベツ、にんじん、たまねぎなどの野菜と一緒に大鍋に入れてトロ火で一晩中煮込んだ。班ごとに当番を決めて時間を1時間ずつに区切って火守りをしながら煮込んだ。調理師さんに「絶対にぐらぐら沸騰させたらだめだよ。野菜などが碎けてスープが濁るからね。」と教わったので、注意深く煮込んだ。満点の星空のもと、火守りをしながら、担任の教員や友達と心を解き放して話し込んだ。教員の経験話から家庭のこと、友達のことなど、話題は多岐に及んだ。たき火を囲みながらの教員と生徒の語り合いの姿は学校ではなかなかできない。とてもいい企画であった。

【スタミナラーメン作り】

前夜煮込んでできた鶏がらスープは、翌朝の食事のスタミナラーメンのスープにした。味付けは宿泊施設の料理長にお願いした。

【ボランティア活動】

3泊4日の最後に、自分たちが使った場所や施設の清掃活動をした。ゴミが一つもない

ように、次のお客さんが気持ちよく使えるようにきれいに掃除した。

オ 指導や支援の実際

このキャンプは、中学校生活の基本になる「折り目正しい集団生活ができるようになる」ことを目的の一つにしているため、人から指示をされて動くのではなく中学生らしく今はどう動くべきかを自分で考えて行動できるようになることを指導したいと考えた。そこで教職員全体で指導方針を共通理解をして次のように定めて実践した。

- ・ あらかじめ示した時間スケジュールに沿って生徒が受け身でなく自主的に活動するよう、指導者が細かい指示や号令をかけない。
- ・ 作業がたとえ要領が悪くても、とにかく生徒の力でやらせてみる。失敗をすることを大切にして、その上でどうすればもっとうまくできるかを考えるようにする。あれこれと指導者が先回りして手を出してやってしまわない。
- ・ ナタ、ナイフ、のこぎり、包丁などの刃物を使う場面が多いので、安全には常に気を配る。
- ・ 質の高い活動をめざす。そのために要所では、専門家である外部指導者を依頼する。

(3) 事後指導

生徒にとって入学直後のこの行事はよほど強烈な印象を与えており、この時の自主的な体験に基づいて生徒から出される豊かな発想を以後の学習活動の中で可能な限り取り上げていく姿勢をとっている。

3 体験活動のための体制

(1) 学校の体制

この行事を企画した最初のきっかけは、あるときの職員会で、「今の子どもたちにたくましさやがまん強さを育てるにはどうしたらよいのかなあ。」「自分もそう思う。困難に出会ってもすぐへこたれてたり、あきらめたりしないで、自分で工夫して困難を乗り越えようとする力を育てたいね。」と次々と若手教師から発言があったことである。そして、自然の中でのキャンプを行い、仲間と集団で生活や活動をする中で、子どもたちが自ら様々な課題を克服していくたくましい力を育てる機会を設ける方向でまとまったものである。したがって、第1学年だけでなく全学年の教師が強い関心を持っているので、学校をあげての協力体制ができている。

(2) 家庭や地域

保護者には、毎回この取組を行う前に学校に集まっていたいで説明会をしている。行事の様子をビデオ撮影をして希望者に頒布する形で保護者に報告をしている。地域には有線テレビ放送の番組で放映して視聴していただき、大変好評である。

(3) 関係機関・施設との連携

宿泊施設の支配人兼料理長に献身的に協力をいただいた。また、その協力で、生徒がけがをしたり病気になったりしたときのために、町内の病院で24時間いつでも受け入れていただく体制づくりができた。

(4) その他

活動に必要な経費は、3泊4日で生徒一人当たり7,000円程度になる。全額保護者負担である。

4 成果と課題

子どもの規範意識が十分育っていないのではないかということが問題になっている。本校の活

動は、生徒が規律を守ることの大切さを自覚する上でも、大成功であった。入学直後に行ったために、中学校の生活の在りようをしっかりと身につけることに効果的であった。また、学級の仲間、教員との人間関係づくりにも効果があった。そして、何より自分で考えて行動することの大切さを学んだ。更に、道具を使って薪を作って火を起こして、自然の恵みをいただいて食べて命をつなぐことに、改めて感動し、感謝の気持ちを持ったようだ。

課題としては、教職員の異動で人が変わっても、学校として教職員全体の最初の意気込みと指導の質をしっかりと維持していくことである。

5 今後の取組の方向

本校の活動は、生徒の実態を踏まえ、教職員が力を合わせて開発した企画である。その成果は、教職員も保護者も地域も認めているところであり、何よりも生徒自身が一番感動し、喜んだ行事である。さまざまな課題を乗り越えながら、今後もさらに充実発展させていきたい。

【本事例活用に当たっての留意点】

本校は、まわりに白砂青松の広がる自然豊かなロケーションにある。しかしながら、必ずしも自然豊かな地域の子どもが自然体験が豊富だとは限らない。大切なことは、豊かな自然環境だけではなく、そこで豊かに自然体験を展開できるかわり方が必要なのである。前者をハードというならば、後者はソフトということができよう。本事例は、ソフトとしての自然体験活動を取り入れることとした一つの提案ということができよう。

子どもたちは、様々な自然体験を通して自然環境への認識を深めると同時に、友達と協力したり規律を守ることの大切さを実感している様子が成果として報告されている。このように友達や社会との関係性の改善も自然体験で得られる大切な成果といえよう。